

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13842

研究課題名（和文）「考え、議論する道德」の理論的基礎づけ 思考・他者・対話を中心に

研究課題名（英文）Thinking and Discussing in Moral Education: From the Perspective of Dialogical Philosophy

研究代表者

平石 晃樹 (Hiraishi, Koki)

金沢大学・学校教育系・准教授

研究者番号：00786626

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「特別の教科」となった道德教育の核心的コンセプトである「考え、議論する道德」の理論的な基礎づけを企図するものである。教科化された道德教育の方法論についてはすでに一定の研究蓄積があるものの、「考え、議論する道德」という標語の内実が深く問われることはない現状がある。本研究は、道德教育と「思考」・「他者」・「対話」の関係を原理的な次元で解明することでこれからの道德教育の理論的な基盤を構築し、それに支えられた確かな実践的な示唆・提言を行うものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教科化後の道德教育については、授業実践上の教育方法論や技術論の観点からすでに一定程度研究が進められてきているものの、肝心の「考え、議論する道德」という根幹のコンセプトについては内実が深く吟味されることなく標語として消費されている現状がある。本研究は、人間の道德性と思考との連関や道德的価値の理解の深化と対話との関係などについて徹底した理論的検討を行うことで、従来の研究の重要な欠落部を補うものである。

研究成果の概要（英文）：This study aims to establish a theoretical basis for the core concept of new moral education in Japan, namely, "moral education through thinking and discussion". Although there is already a certain amount of research on the methodology of moral education, the philosophical meaning of the motto "moral education through thinking and discussion" has not yet been sufficiently clarified. This study builds a theoretical foundation for future moral education by clarifying the relationship between moral education and "thinking", "others" and "dialogue", and makes solid practical suggestions and proposals supported by this foundation.

研究分野：教育哲学

キーワード：道德教育 教育哲学 哲学対話 批判的思考 対話哲学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

道徳の教科化は、主体的な内省や言語活動を新たに重視することで、読み物資料の登場人物の心情理解に偏重しがちであった従来の道徳教育からの質的転換を目指すものであった。これを受け、近年の学習論の成果などを取り込みながら道徳教育の刷新を図る研究は、すでに一定の蓄積を見せている。しかし他方で、それらの研究の多くは授業実践上の方法論や技術論に終始する傾向が強く、「考え、議論する道徳」という標語だけが内実を問われることなく独り歩きしている現状がある。また、道徳教育に対して、教育哲学分野および倫理学分野から活発な応答がなされていない現実もある。結果、日本の道徳教育界は、隣接する学問領域からの協力や支援を欠いたまま、現場で培われてきたノウハウを無批判に再生産する傾向にある。

これらのことに鑑みれば、人間の道徳性と思考との連関や道徳的価値の理解の深化と対話との関係などについて徹底した検討を行うことで、教科化後の道徳教育の根幹について確かな理解を打ち立てることが喫緊の課題となっているといえる。

## 2. 研究の目的

以上を背景として、本研究は、「特別の教科」となった道徳教育の核心的コンセプトである「考え、議論する道徳」の理論的な基礎づけを目的として設定する。より具体的には、教育哲学および倫理学を筆頭とする関連諸学の知見を取り入れながら、本研究は、「人間の道徳性と思考という人間の理性的活動はどのように結びつくのか」、また、「他者との対話がどのようにして人間の道徳性の成長を促すのか」という根本的な問いをあらためて提起し、「考え、議論する道徳」をめぐって原理的かつ統一的な解釈を打ち立てることを企図する。

## 3. 研究の方法

上記の目的を果たすために、本研究は、「考え、議論する道徳」を構成する根本要素として、「思考」「他者」「対話」の三つを抽出し、それぞれと道徳との関連を理論的な水準で明らかにすることを目指す。その際、特に現代の独仏語圏の教育哲学および倫理学をフィールドとして文献調査・研究を進め、その過程で得られた学際的な知見を総合的に活用する。

## 4. 研究成果

### (1) 道徳教育と「思考」との関連

まず、レヴィナスの「無限の観念」、ローゼンツヴァイクの「新しい思考」といった現代ユダヤ思想における思考論の読解に取り組んだ。彼らはそれぞれの仕方で、思考を「魂の内的対話」(プラトン)として捉える伝統的な理解を問い直しながら、他人との関係に開かれることとして思考を把握している。思考とは「一者が二者へと打ち砕かれること」(シェリング、G. ベンブーサン)であるならば、優れた意味で他人との関係である道徳的経験と思考の間には本質的な関連があるといえる。

次に、主としてレヴィナスに依拠しながら、思考と批判との内的連関について考察を行った。彼によれば、他人との関係としての思考は、対象的思考であるよりも前に、みずからの素朴さに初めて気づき、それを問いただす、という意味での「批判」という形を取る。道徳科の授業はしばしば「分かりきったことを学ぶ」だけのものと言われるが、道徳と思考は不可分であり、その際の思考は批判という形を取るならば、道徳的思考とはむしろ道徳の「当たり前」の問い直しを含まねばならないことになるだろう。

最後に、日本の道徳教育における定番教材の分析を通じて、批判としての思考が道徳教育の実践者にとって持ちうる意義について検討した。道徳科の定番教材には内容項目についての特定の理解に知らずと誘導する仕掛けが幾重にも張り巡らされているため、「道徳」という名の詐術に騙されていないかを授業実践者はまず疑う必要があることが明らかになった。

### (2) 道徳教育と「他者」との関連

まず、道徳科において特に問題となるのは「価値観を共有しない他者」であることを踏まえたうえで、そうした他者といかに関係を構築するかを「歓待」という観点から検討した。具体的には、レヴィナス、デリダといった現代フランスの哲学的歓待論を詳細に検討することを起点として、パンジャマン・ブドゥ、ギョーム・ル・ブラン、アンヌ・ゴットマンら、広く人文社会諸科学における現代フランスの歓待論の読解も並行して行った。その結果明らかになったことの一つは、とりわけデリダの歓待論が浮き彫りにする、歓待の自壊性とも言うべきものである。歓待の条件は主人が主人であり続ける同一性である。だがこの同一性は客を主人に同化する結果を伴う。したがって歓待の条件は同時に歓待の不可能ともなっている。教育学において歓待は身につけるべき徳のひとつと見なされがちだが、デリダの所論はそうした凡庸な理解を問いなおす視座を提供するものである。それはまた同時に、歓待という概念が、「子どもという新参者を世界に導き入れるいとなみとしての教育」(アレント)に刻まれた課題と困難を把握するため有効なカテゴリーでもあることを示してくれてもいるということが明らかになった。

### (3) 道徳教育と「対話」との関連

前項の研究主題との関連で、道徳科において特に問題となる「価値観を共有しない他者」と関係を取りむすぶ方法として「対話」を位置づけたうえで、まず、教科書や教師の想定におさまらない児童生徒の発言 という具体的な場面を想定しつつそこから開始され得る対話のあり方について考察を行った。その結果として明らかになったのは、第一に、教科書や教師の想定におさまらない児童生徒の発言 は道徳科の内容項目の理解をより深めるための一契機となりうるということである。そして、第二に明らかになったのは、そうした発言に対する教師の応答として、「なぜそう思ったのか？」という理由を尋ねる問いが重要であり、この問いを皮切りに道徳科の授業内で対話が生起しうるということである。理論的な志向の強い本研究からこうした実践的な示唆が導かれたことは、本研究の大きな成果の一つとして数え入れられる。

以上の作業と並行して、近年国内でも注目を集めている「哲学対話」の理論と実践について調査・検討を行いながら、道徳科に哲学対話をいかに取り入れることができるかを考察した。教科書にそって進行する日本の道徳教育のスタイルは哲学対話と一見すると相性が悪い。しかし、内容項目を具体化した各教材には哲学的な問いが潜在しているため、両者を接続させるにはまずは教材の入念な分析が必要不可欠であることが明らかとなった。今後は、国内外での優れた実践例に学びながら、近隣の小学校と連携をはかりつつ、哲学対話を道徳科の授業に取り入れるためのより具体的な方策について検討を進める予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 平石晃樹	4. 巻 13
2. 論文標題 The Revival of Moral Education in Post-War Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要	6. 最初と最後の頁 200-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平石晃樹	4. 巻 31
2. 論文標題 フーコーの自己形成論 「はじまり」の問題を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 29-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 平石晃樹
2. 発表標題 「よく被らなくてはならない」 『教育学のパス論的転回』から出発して
3. 学会等名 日本教育学会近畿地区 オンライン企画「『教育学のパス論的転回』を読む」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平石晃樹
2. 発表標題 BildなきBildung、あるいは「生き様」のエートス フーコーの自己形成論をめぐって
3. 学会等名 教育思想史学会第31回大会 フォーラム「近代教育批判以後の主体性 後期フーコーにおける「プラトニズムのパラドックス」を中心に」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平石晃樹
2. 発表標題 被造性・繁殖性・分離 中真生『生殖する人間の哲学 「母性」と血縁を問いなおす』によせて
3. 学会等名 レヴィナス協会主催 中真生『生殖する人間の哲学 「母性」と血縁を問いなおす』合評会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 平石晃樹
2. 発表標題 School as a Place of Im-possible Hospitality: From a Derridean Perspective
3. 学会等名 Philosophy of Education Society of Australia 50th Anniversary Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 平石晃樹
2. 発表標題 タクトを超えて ヴァン＝マーネン、レヴィナス、道德教育
3. 学会等名 レヴィナス協会第5回大会 シンポジウム「教育と対話 レヴィナスとローゼンツヴァイクから出発して」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 平石晃樹
2. 発表標題 レヴィナスの「方法」と「援用」 安喰勇平『レヴィナスと教育学 他者をめぐる教育学の語りを問い直す』によせて
3. 学会等名 安喰勇平『レヴィナスと教育学 他者をめぐる教育学の語りを問い直す』合評会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 杉村 靖彦、渡名喜 庸哲、長坂 真澄（平石晃樹「享受と傷 同 の内なる 他 としての主体性をめぐって」（pp.191-209）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 422
3. 書名 個と普遍	

1. 著者名 レヴィナス協会（（平石晃樹「レヴィナスと教育」（pp.227-234）、「傷つきやすさ／可傷性」（pp.58-60）、「『困難な自由』」（pp.114-118）、「『超越・外傷・神曲』／『レヴィナス・コレクション』」（pp.145-147））	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 352
3. 書名 レヴィナス読本	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------